

アンベス・R・オカンポ

フィリピン / 歴史学 Ambeth R. OCAMPO

歴史における記憶と忘却～日本とフィリピンの関係から考える～

■開催日/2016年9月18日(日) 11:00～13:00
 ■会場/アクロス福岡地下2F イベントホール
 ■参加者/200人

〈第1部 基調講演〉

過去の何を記憶し、何を忘れるのか。 未来に向けた歴史のとらえ方を提議する



この受賞を機にこれまでの人生を振り返り、歴史家になった理由、過去が現在と未来にとって必要な理由を考えました。皆さん、歴史学は自分に必要ないものとお考えでしょうが、我々が未来に向かううえで歴史は非常に重要なものです。

私は子どものころ、1970年の大阪万博でフィリピンのパビリオンや、他の国旗に並んではためくフィリピン国旗を見て心躍ったことを覚えています。万博は、私の目を世界

の文化の多様性や国のアイデンティティーへと向けてくれました。

私は幼少期にフィリピンで『隠密剣士』を見ましたし、私の伯父は親日家でした。しかし、日本の占領下で日本軍に身内を殺されたフィリピン人もいて、世代により日本観は違います。日本人は原爆投下を被爆者として覚えているでしょう。しかし、東南アジアでの日本軍の行動は言及されず、互いの記憶にギャップがあります。

日本とフィリピンの歴史をもっと遡ると、16世紀末には既にフィリピンに1000人超の日本人が住み、交易商人、職人、ポディーガードなどをしていました。また、ルソン壺、キリシタン大名の高山右近、日本に滞在したマリアノ・ボンセやアルテミオ・リカルテといった歴史上の人物の例が示すように、様々なレベルで深いつながりがあります。

役に立たないちょっとした情報も集めることによって、私たちはもつと歴史的なつながりを理解し、洞察を生むことになると思います。歴史の何を記憶し、なぜそれを記憶するのか。私たちは過去の記憶によって現在を理解し、未来について考えをめぐらすことができます。最後にフィリピンの国民的英雄ホセ・リサールの言葉を紹介します。「過去の記憶を持って未来へ向かっていこう」。



〈第2部 パネルディスカッション〉



●コメンテーター
藤原 帰一
 (東京大学・大学院法学政治学
 研究科教授)

●コーディネーター
清水 展
 (京都大学東南アジア研究所教授)

反日感情を乗り越えて交流が続く 二国間に必要なものは

藤原氏は、マルコス政権が倒れて間もない1989年、学会でオカンポ氏が人柄や服といったトリアの詰め合わせのような独自の視点から国民的英雄ホセ・リサールを語る姿に驚いた、と第一印象を披露。過去を空想することを拒み、歴史の姿を捉えることに努めてきた、と氏について語りました。質疑応答では、戦後の反日感情を乗り越えて日比関係が友好的になっている理由、ドゥテルテ大統領の反米的な発言の背景、日本とフィリピンがよい関係を築いていくために気をつけたいこと、という会場からの質問にオカンポ氏は穏やかに語りかけていきました。藤原氏は、オカンポ氏のように「なぜだろう?」「知りたい」という好奇心を持ち相手のことを知ることが我々の将来を作っていく土台になるのだろう、と締めくくりました。

学校訪問

■実施日/9月16日(金) 10:00～11:00
 ■会場/上智福岡中学高等学校

オカンポ氏は自身が歴史家になった理由を、読書好きで好奇心旺盛だったからと語り、ホセ・リサールの足跡を追い、英国の図書館で100年前にリサールが手にした本を見つけて興奮した様子を生き生きと話しました。また、リサールが来日してメモを残していることや、今のフィリピンの人々の生活に浸透している蚊取り線香や氷菓が日本と関わっていることを伝え、日本とフィリピンとの意外なつながりを話しました。日記をつけ自分の歴史を振り返ることで誰もが歴史家になれると話し、歴史の面白さを説きました。

生徒たちは、ドゥテルテ大統領や原爆投下に対する意見、旧宗主国への思

いについて英語で次々と質問。オカンポ氏はわかりやすい言葉で「大統領は犯罪者に厳しいが、人権は守られるべきではないか」「被爆国という一方の角度だけから物事を見ないように」「第二次世界大戦だけでなく、時代を遡って日本とフィリピンの長い交流を見ることが大切」など丁寧に回答。オカンポ氏の生きた歴史の授業に生徒は耳を傾けていました。

